

新聞記者・1dayインターンに参加した

学生記者 片桐将吾 (法学部3年)

「記者職には、好きだけでは背負えない責任がある」

10月19日に行われた読売新聞社の1dayインターン「記者カフェ」に参加して、私は、はっきりとそう確信した。本稿では、私がどのようにして、冒頭の確信に至ったのかについて、記者カフェに参加する前後の認識を示しながら、考えていこうと思う。

記者カフェに参加するまでは、仕事とは、好きを基本に組み立てるべきものであり、その点さえクリアできれば、問題ないと考えていた。

有名な実業家の方もよくそう言っているし、作家マクシム・ゴーリキーの「仕事が楽しみならば人生は楽園だ。仕事が義務ならば人生は地獄だ」という言葉もある。

私自身に引き付けてみると、「雑多な好奇心を持ち、読書・作文・会話が好き、いつかは情報を一次データから整理できるようになりたい」という気持ちから、仕事を考えればよいということだ。

記者職は「好奇心を、シゴトに」という読売新聞の採用サイトにある言葉の通り、私の「好き」を実現できる仕事のひとつだった。

しかし、記者カフェに参加したことで、上述した認識だけでは、記者職はやっていけないと強く感じた。いくつかのイベントが行われた記者カフェの中で、これまでの私の認識を大きく変えたのは、記者カフェの後半に行われた「模擬記者会見」だ。

模擬記者会見では、事故発生にあたって実際に警察が発表する「模擬広報文」をもとに記事を作成すると

いう作業が行われた。

模擬広報文の事故内容は、女性3人が車にひかれて死亡した、とするもので、私は、ここで考え込んでしまった。実際にこの事故取材するのは、とても気が重いに違いない。

哲学者のレヴィナスが「他者の顔は、わたしを審問し、問い質す。(中略) あたかも自我が他者の死の責めを負わなければならないかのよう



読売新聞東京本社前には箱根駅伝のモニュメントがある、同社は大会共催社

に。あたかも孤独のままで他者を死なせることが自我には許されていないかのよう。まさしく自我を指定し、自我に要求し、自我に懇願する顔が自我の責任を召喚する」と言っていたが、取材を通して召喚される責任とどう向き合えばよいのだろうか。

ここでは「仕事が好き」などということは、役立ちそうにない。しかし、模範解答と解説を聞き、一つの

答えを見つけることができた。それは、「再発防止に寄与する」ということだ。

事故をできるだけ詳細に報道し、数か月、数年ごとに特集を組む。そうすることで、社会に注意を喚起し、可能な限り事故を減らす。これが、召喚された責任との向き合い方だと感じた。一般化して言い表せば、「取材過程で形成される責任を、社会貢献によって果たす」ということになる。

そういえば、記者カフェの前半で紹介された言葉に、「私たちは、新聞は公器だと思っている」というのがあった。私は、ここにきてようやく、その意味するところが分かった。

新聞は公器だと紹介された当時は、「好き」からのみ記者職を考えていたので、その言葉の持つ重みを理解できていなかった。もちろん、記者職は、「好き」を基礎に考えてよい。しかし、それだけではいけないのだ。取材する中では、とうてい「好き」だけでは背負えない責任が形成される。その責任を果たすためには、「社会をよくするんだ」という信念が必要になる。

その結果、「新聞が公器としての役割を果たさなければならない」との確信に至るのだ。

また、この確信を得ることは、既存メディアへの不信が高まる現状を打開するためにも、相当に重要であると思う。

私もこれから、しっかりと考えていく。記者カフェに参加することで、記者職を「好き」と「責任」の両面から捉えられるようになった。記者カフェに参加できてよかったと、強く思う。